

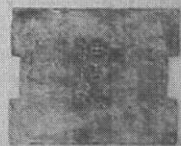
大孟鼎

紀元前一世紀
(西周時代・康王期)



原寸大

中国古代の青銅器文化は、殷周時代に大いに栄えた。これらには、その制作の動機を記した文章が鑄刻されている。これは、珍しい方鼎の拓本である。器形の全体をうまく構成しながら拓している。鼎内の銘文は、別に上方に拓している。この拓法の始祖は、僧六舟とされる。この鼎は、近代の拓工・馬子雲の所拓である。



木録

金石書画拾遺 (19)



大盂鼎

木雞室

伊藤 滋

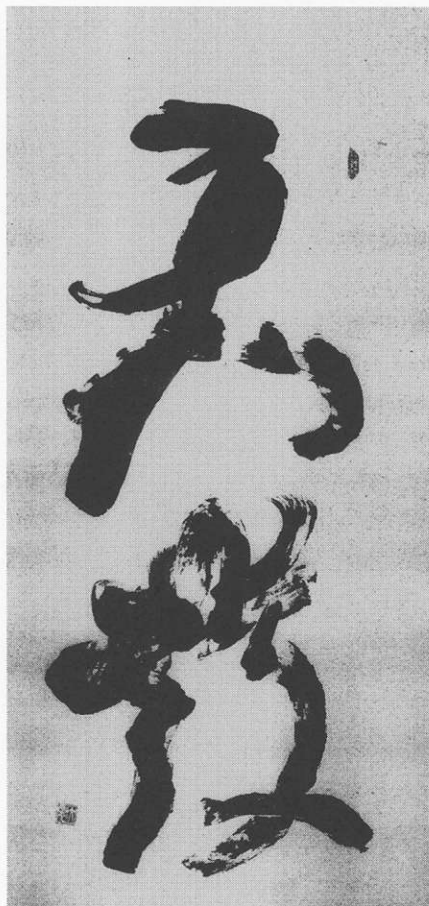
金文の名品の第一に位置する。『毛公鼎』『散氏盤』『大克鼎』とともに、この『大盂鼎』を加え、さらに『虢季子白盤銘』を合わせて、西周期の金文の五大器と称することができよう。

『毛公鼎』『散氏盤』の二器は台湾の故宮博物院に、『大盂鼎』『虢季子白盤銘』は北京の中国歴史博物館に、『大克鼎』は上海博物館に蔵されている。ともにそれぞれ書風が異なり、独自の趣を示している。『大盂鼎』は、鼎内腹壁に銘文が鑄込まれている。十九行、二百九十一字であり、周の康王が、二三年に大臣であった盂に示した冊命である。周室の成立の経緯、殷の滅亡の教訓等を記す。その書体・書風は、金文銘中の最も重厚で力強く、堂々とした書風である。さきの五大青銅器中において最も見事な銘文と言えよう。図版の銘文拓本は、近年に亡くなった傳大貞が、六〇歳代に自ら手拓した精拓本である。拓の端に朱筆で題記を書き入れてある。清末、民国期の拓を数種目にしたが、この傳氏手拓の精本に及ぶものは見たことがない。

書道芸術院 創立発起人 (16)

山崎大抱

「天発」



1985年の作

(140×70cm)

明治41年—平成3年(1908—1991) 高知県幡多郡下田村(現四万十市)に出生。昭和2年川谷横雲先生に書の手解きを受け、書の道に入る。

同4年、手島右卿先生と出会い、生涯の師と仰ぐ。同10年文検合格。同22年日本書道美術院審査員。同年書道芸術院に参加するが数か月で離脱。同23年高知より静岡市に移り、高等学校に勤務。同27年独立書道会(現独立書人団)結成の中枢となる。静岡でもご自身の研究グループ抱朴会を結成。その後、右卿師の提唱する現代書理念「象書」の開拓・実践者として活躍。

燃えるような作家精神は生涯に亘って尽きることなく、数々の名作を生む。東京国立博物館には「臥游雜詠」「眩華」が収蔵され、北京の日本大使館には「玄」がある。その他ニューヨーク市長室、クイーンズランド州立美術館、ハンブルグ国立博物館、西ドイツ・バーデンバーデン国立美術館など世界各地で大抱芸術は光り輝いている。

公務としては日展審査員、毎日書道会理事、独立書人団理事長・代表、東京芸術大学・ハーバード大学客員教授、専修大学講師、日本書道専門学校教授など数々の要職を歴任。内外で後進の指導育成にも努められた。

昭和59年高知県中村市名誉市民となり、市立中央公民館には書碑「眩華」が建立されている。

(大野祥雲記)

書のひろば

理事長 恩地 春洋

書道界の動向

毎日書道会理事会報告

新しい国立新美術館での毎日書道展の進出と共に、新しい書道界の風を感じることです。毎日書道会理事会報告を略記します。

1、毎日59回展特別陳列は、生誕百年記念「いまに生きる金子鶴亭の書」

・平成19年7月11日(水)～8月5日(日)

・第59回毎日書道展東京会場内特設

2、第二回日中女流書道家代表作展

北京展

「日中文化・スポーツ交流年」の一環として、北京と東京で開かれる。

・北京展(二〇〇七年)

会期 10月2日(火)～

10月10日(水)

会場 中国美術館

・東京展(二〇〇八年)

会期 7月8日(火)～17日(木)

会場 東京都美術館

・出品者(日本200名、中国200名)

院関係出品者 9名(既報)

○開幕式典など

10・2 10時 開幕式 中国美術館

18時 祝賀会 人民大会堂

10・10 12時 閉幕

訪中団の計画あり、参加希望者は院事務局に問いあわせを。

3、毎日書道展60周年記念事業

(1) 飯島春敬先生コレクション展

重要文化財を含む春敬先生のコレクションの公開

(2) 毎日現代代表作家全国巡回展

13会場が予定されている。

神奈川展 3・27～4・6

広島・岡山展 4・15～4・20

高知展 4・22～4・27

奈良展 6・4～6・8

九州展(鹿児島) 7・14～7・21

松本展 9・22～

旭川展 (未定)

盛岡展 11・12～11・16

秋田展 11・21～11・26

函館展・沖縄展・静岡展・豊橋展は平成21年の予定だが期日未定

(3) ブラジル移民100年記念

「現代日本の書代表作家サンパウロ展」

高校書展「書の甲子園」に参加

されている、ブラジル書道愛好会

代表の若松如空氏の協力を得て実

現に向けて進行中

(4) 現代日本の書代表作家台北展

・会期 2008年10月又は11月の二週

・会場 国立国父記念館中山国家

・出品 200名に依頼の予定

・故宮博物院蔵の国家級の書作品

を特別見学作品として展示した

だけの予定(中華民国書学会張炳煌会長が全面協力)

4、来年の「現代の書新春展」は、本年度、毎日展出品の60歳以上の審査員の中から選考されます。

(財)毎日書道会 書壇 理事、監事、総務、評議員、参事 一覧

団体	顧問(12)	理事(13)	監事(2)	総務(11)	評議員(27)	参事(19)
創 玄	最高:大平 山満 常任:金子 聡松 常任:中野 北溪 顧問:内山 玲子	大井 錦亭 吉田 成堂 石飛 博光		田岡 正堂	辻井 京雲 大平 匡昭 関口 春芳 長谷川 牧風	大硯 咲子 加藤 松子 矢田 桂雪
日書美	常任:加藤 湘堂 常任:小山 子 常任:山崎 暁子 最高:稲村 雲洞	飯島 春美		渡辺 墨仙	鬼頭 墨岐 藤沢 麦草 松井 玉等 中原 茅秋 玉村 露山 田村 空谷	志津 和子 貝原 司研 小森 秀雲 野崎 嶺南 濱田 素山 道方 芳堂
奎 星		岸本 太郎 菅野 清峯		大楽 華雪	片岡 重和 柿下 木冠 山中 翠谷 浜谷 芳仙 下谷 洋子 辻元 大雲	小島 碧雲 小伏 竹村 山下 皓映 村野 大仙
独 立	最高:小林 抱牛	貞政 少登	仲川 恭司	竹内 鳳仙		
書道芸術院		恩地 春洋		香川 倫子		
東 京	常任:鈴木 桐華	野口 白汀		林 蕉園	林 竹聲 柳 碧蘇	
日本書道院	常任:田中 凜雲			中村 雲龍 宮崎 紫光		高橋 静豪
現代書道院				長井 蒼之 阿部 海鶴		
書 壇 院	顧問:皆川 雅舟			水川 舟芳 遠藤 彊		
六 友		関 正人		高際 翠邦	薄田 東仙	
篆 刻		渡辺 寒鷗	神郡 愛竹			
刻 字						
温 知						
玄 潮					寺井 朴堂 後藤 竹清	桑山 大道
白 峰						
あきつ		○米本 一幸 船本 芳雲			百瀬 大蕪	
書 燈						渡辺 洋一 岩井 春彦 森本 龍石
みちのく						
春 容						
北 辰					小原 道城 青柳 志郎	
北海道書道協会					○三宅 相舟	
北陸書道院						
相 岐 会						

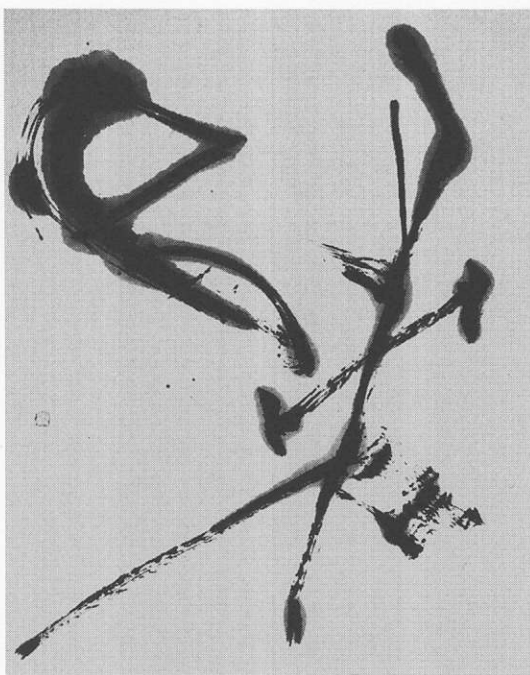
漢字 (四)

上妻華竹

ここ数年、作品の中に美しい空間をいかに残すかを試行錯誤している。私の場合一字書が多いので、細線で表現することで空間を生かしたいと考え模索中である。

掲載の作品は、第58回毎日書道展に出品した甲骨文の「帰」である。これは四・五尺×三・五尺の用紙に偏と旁を逆三角形に構成、偏を短くし、下部に大きな空間を美しく残そうと思った

第58回毎日書道展「帰」甲骨



上妻華竹書

がちよっと間が抜けてしまった。そこで隣の鋭い細線で空間を切ってみた。これで、うまくいったかな？ 少々気に入った作品である。

細線の作品は空間は取れるが、それを生かすために、線の強さ、変化に苦労する。一本一本の線に生命を吹き込み、美しい空間を生かした作品をこれからも模索し続けたい。

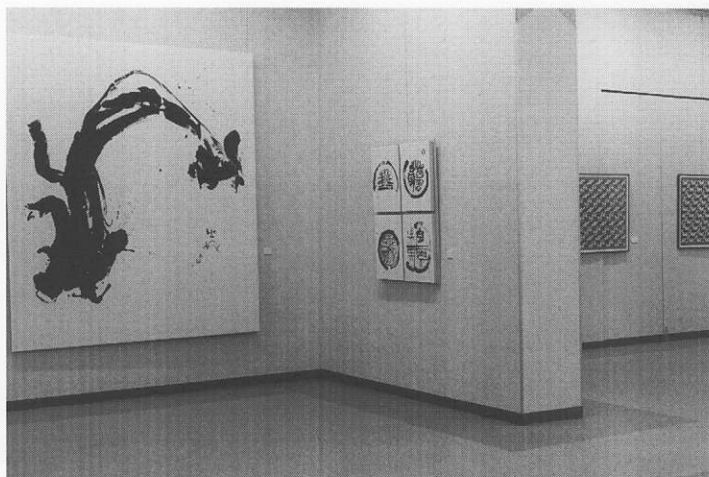
21世紀の書

—私の主張—

前衛書 (四)

真下京子

よく「習字の先生ですか」と言われ「いいえ、書です」と言い直している。一般には書が「芸術」であるという感覚は薄く、音楽や美術に比べ芸術としての扱いは貧弱である。



1999年 画家 富沢秀文氏との2人展 妙義山麓美術館
題名一虹 (左) 瓦当文 (右) 富沢氏作品

これは明治15年、小山正太郎と岡倉天心との論争である。正太郎は「書は美術でない。書は言葉(広い意味で文学)である」と考え、天心はこれに反論した。この論争が西洋的視点から書を芸術ジャンルに含めるか否かの論争の始まりであり、現在も書の立場に影響を及ぼしている。東京芸術大学にも書道科はなく、国立近代美術館では書の企画展は開催されていない。

私は、書が他芸術とどこが共通でどこが異なるのかを考えたと思う。そのため、意識して異なるジャンルの作品を鑑賞し、意識して他ジャンルの方々とも作品展を行っている。

書は芸術なりの主張をもっとしていくべきではないか。二十一世紀の書は、他芸術との融和や、生活様式に取り込みやすい表現の工夫も必要であると思う。

「時の歩み」

阿部 珠 翠

(現代詩文書部審査委員)

時の歩みは三重である。

未来はためらいつつ近づき、

現在が矢のように早く飛び去り、

過去は永久に静かに立っている。

(ベートーベン作曲 第九交響曲第四楽章「歓喜に寄す」の歌詞より)

恩師、加藤翠柳先生が逝かれてから早、8年の歳月が流れた。今、加藤白柳先生に御教示をいただいている。

書の道、40年の「時の歩み」の中で、私は「最高の良き指導者」両先生に巡り会えた。そして、現在、芸術院展では、翠柳先生にご指導いただいた現代詩文書で審査委員として、毎日展では、

白柳先生にご指導いただいている前衛書で会員として作品を発表できる幸せを得ている。

「過去は永久に静かに立っている。」

翠柳先生には、「書線」を厳しくご指導いただいた。特に、古典理論と条幅研究会(翠原会)では、「法帖と対峙し、古典の中に蔵されているものを見逃さぬこと」を学んだ。

翠柳先生は、述べておられる。

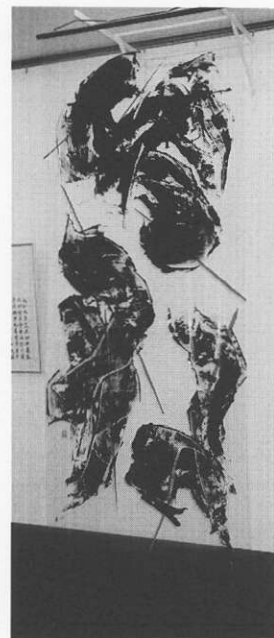
「古典は高い山である。大分近づいたと思っても、山は又遠くに去っていく。」

「古典は、新しい姿を見せてくれる。この前、臨書したとき気付かなかった



第59回書道芸術院展出品

阿部珠翠書



2006年

書 in Miyagi
阿部珠翠書

筆意がここにあったんだなあ。という発見があるものだ。5年、10年前に習ったときと同じで何の発見もなく、感動も起らぬようでは、その臨書者の成長のなかったことを示している。」

さらに、「現代書という美名に隠れて、永遠の書の追求を忘れてはいまいか。私は、その永遠の書を生む原動力は、臨書の鍛錬より外に道はないと考へ習って来た。」……と。

そして、私共に、五巻の「翠柳臨書帖」と「かな手本名歌帖」「草書千字文」等を遺して下さった。先生は、永久に静かに立たず居られる。

「現在が矢のように早く飛び去る」

加藤白柳先生は、

「これからは、論語にある『之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。』をモットーに書を楽しみましょう。」

と、翠柳書院を引き継いで下さった。こうして、白柳先生のご指導により、それまで手探りで書いて来た前衛書に新たな道が開かれた。

前衛書は、心象芸術。先ず、筆を執る前に「何を表現するか。その心の煮詰め方」を問うこと。スイス人彫刻家ジャコメッティの制作例から、その表現手段としての「用具、用材」は、工夫する。というものであった。

特に、用具、用材の自由な選択肢を知り前衛書の世界が大きく広がった。キャンバス地、リキテクス、マットフィアルムなどの画材使用で様々なアイディアが膨らむ。この頃は、私の暴走ぶりを見兼ねて、先生は、「鳥の子紙に茶墨で書くのはどう？」など頻りに、おっしゃるほど……。

先生は、私の心を開放し、自己表現の世界を果しなく広げて下さっている。

あたかも「未来はためらいつつ近づく」かの如く。

両先生に巡り会え、ご指導いただいたことに、深い感謝の念を懐きつつ、「時の歩み」を大切に、「私自身の表現」を確立する「未来」に向い精進してまいります。

〈解説〉

この一巻は、表紙題箋に「楽毅論、紫微中臺御書」と墨書され、光明皇后の皇后宮職を改めた名称である。本紙は、白麻紙三紙を継いで本文を書し、さらに別に黄紙に「天平十六年十月三日 藤三娘」と付

記する。

よって、天平16年（744）、藤原不比等の第三女である光明皇后（701～760）の44歳の筆と判明する。

（編集部）

〓注〓

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
〇〇臨
（押印のみ可）

夫求古賢之意宜以大者遠者先之必迂迴
而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其
未盡乎而多劣之是使前賢失指於將來
不亦惜哉觀樂生遺燕惠王書其殆庶乎
機合乎道以終始者與其喻昭王曰伊尹放

夫求古賢之意、宜以大者遠者先之。必迂迴／而難通、然後已焉可也。今樂氏之趣、或者其／未盡乎。而多劣之、
是使前賢失指於將來。／不亦惜哉。觀樂生遺燕惠王書、其殆庶乎／機合乎道。以終始者与。其喻昭王曰、伊尹放

古筆鑑賞

④

かな研究部

本阿弥切ほんあみぎれ (伝小野道風おののみちかぜ)

①

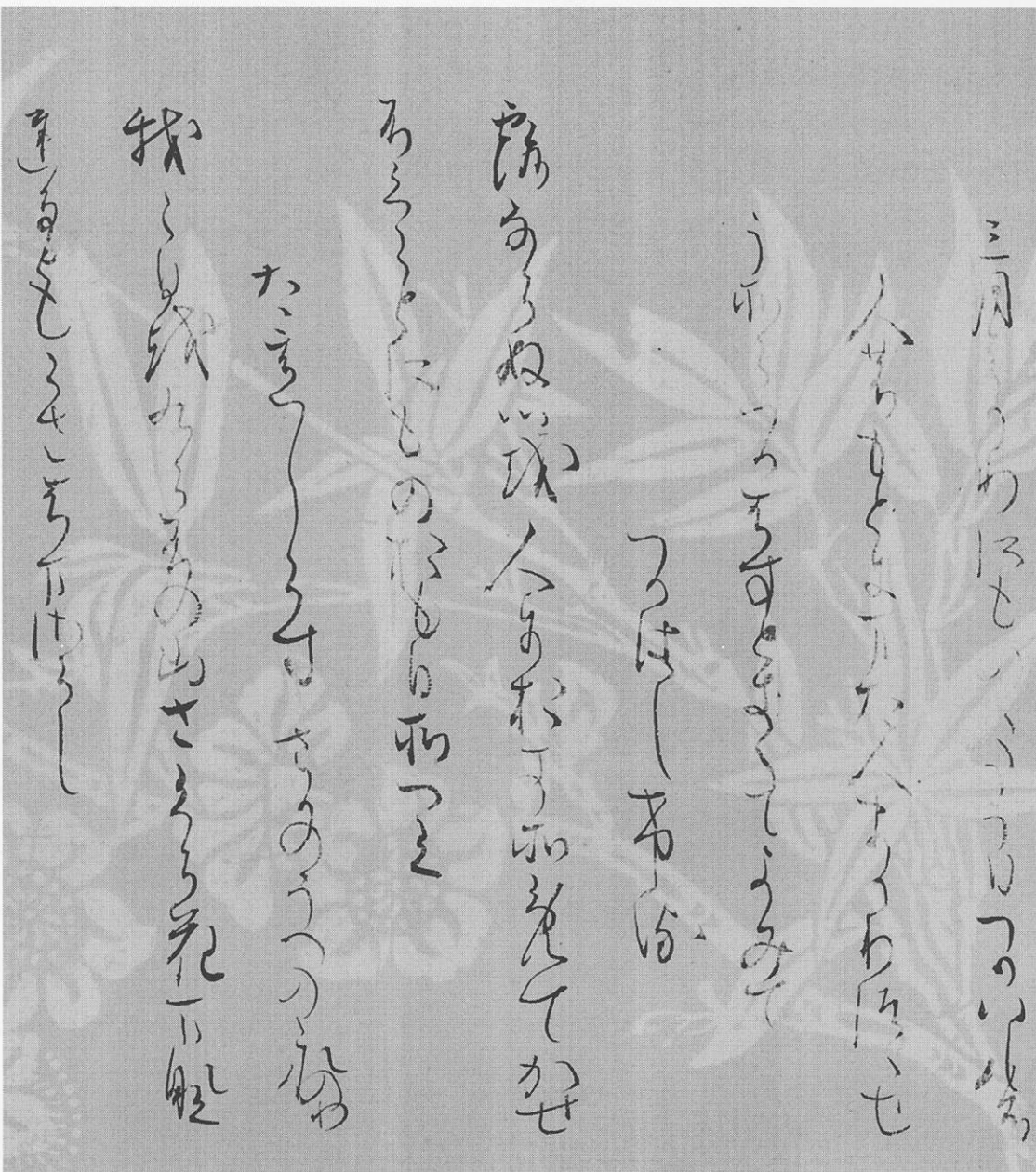
用紙・半紙普通判(料紙可)
〈たて長に使用〉

・別紙を裁断して貼付は不可。

※落款を必ず入れる。署名、

もしくは〇〇臨

(押印のみも可)



三月は者か(可)り(利)にものゝ
た(多)うび(目)つか(可)は(八
しけ(介)る

人の(農)もとに(尔)ま(万)た
人まか(可)り(利)つ(徒)ゝせ
うそ(所)こつか(可)は(者)すと
き(支)ゝてよみて

つか(可)はしけ(希)る(流)
露な(奈)らぬ心を(越)人に(尔)
お(於)き(支)そ(所)め(免)てかぜ
ふ(不)く(久)ごとにものお(於)も
ひ(目)ぞ(所)つく(久)

だい(意)しらず さか(可)のう
へのこれのり(利)
我こひ(目)を(越)く(九)らぶ(不)
の山へのさく(久)ら花ま(万)な
(那)く(久)

ち(遅)るともこさは(者)
ま(万)さ(佐)らじ

「古今和歌集」の写本の本阿弥切は、
江戸時代の初期、近衛信尹、松花堂昭
乗とともに寛永の三筆と称された本阿
弥光悦が、一部を愛蔵していたことに
ちなんでこの名称がつけられた。
所々、胡粉地の剥落があり、文字が読
めない箇所も多い。

〈解説〉

「古今和歌集」の写本の本阿弥切は、
江戸時代の初期、近衛信尹、松花堂昭
乗とともに寛永の三筆と称された本阿
弥光悦が、一部を愛蔵していたことに
ちなんでこの名称がつけられた。
所々、胡粉地の剥落があり、文字が読
めない箇所も多い。

(編集部)

注 かな研究部競書作品は、右の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

漢字規定 初段以上【八月二十日締めきり】 用紙 半紙普通判

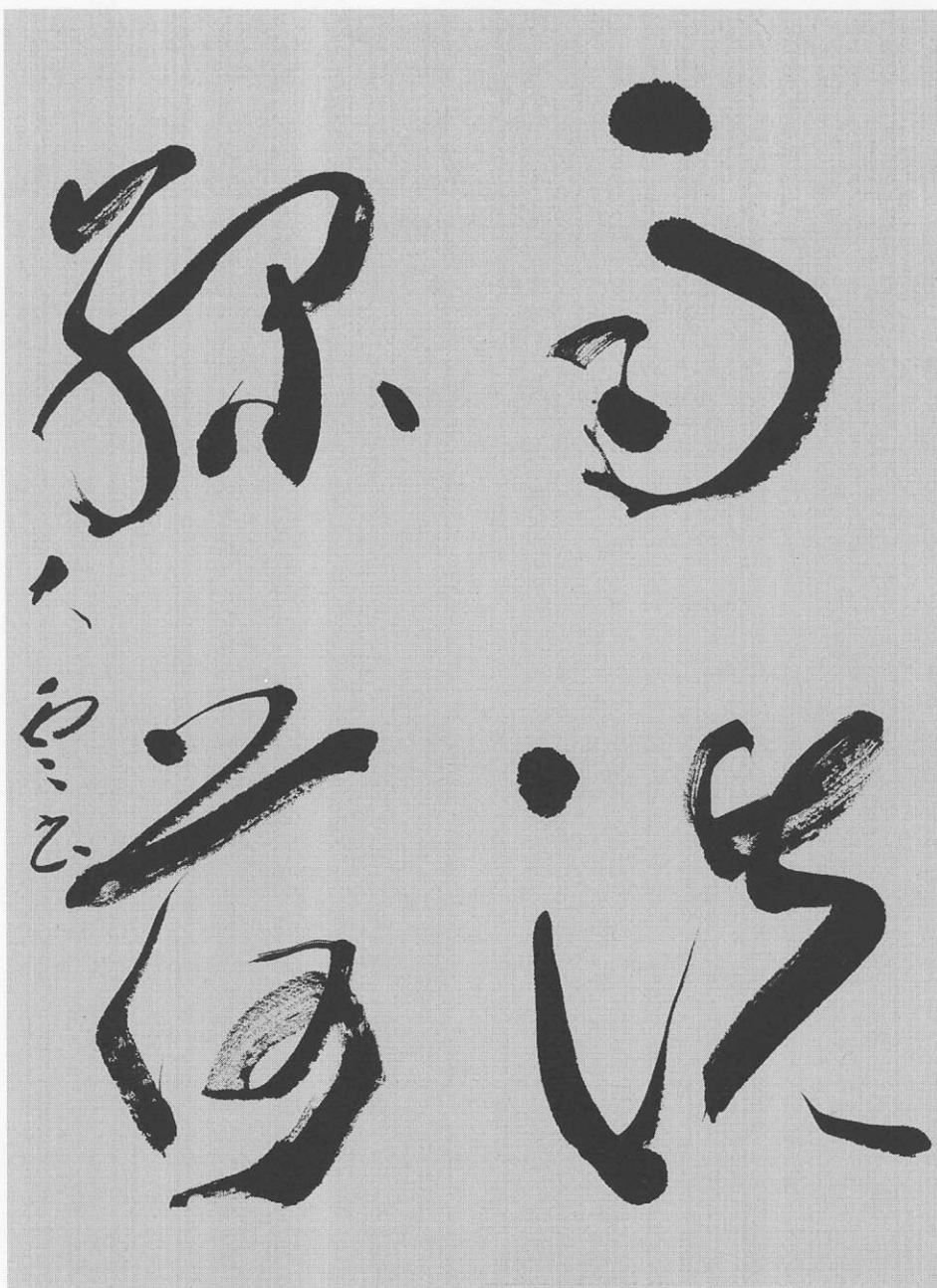
辻元大雲 選書

習い方解説 (四)

辻元大雲

雨洗緑荷

かなり省略のきいた草書で表現してみました。孫過庭書譜と懷素千字文をミックスしたような感があります。筆は羊毫中長鋒を使用。前回は書体について触れましたが、今回は書風について少し述べてみます。書風とは皆様すでにご存じの通り、同じ書体の中の雰囲気の違いであり、肥瘦、大小、緩急など、表現上のリズムの変化、呼吸、強弱など作者の表現意図が鮮明に現れるところでもあります。作者の表現意図は様々です。もちろん書く語句の内容にも影響されますが、どう表現しようかと考えいろいろと工夫する。そこに書風の違いが大きく反映される訳です。力強い表現、逆にソフトなやさしい気分での表現、それぞれに合った書風を見つけることが大切です。



雨洗緑荷

よみ (雨緑荷を洗う)

書体 自由

漢字規定 秀級以下【八月二十日締めきり】 用紙 半紙普通判

小伏小扇選書

寄心清尚 よみ（心清尚に寄す）

書体Ⅱ楷書

寄心清尚

小扇書

習い方解説 (四)

小伏小扇

寄心清尚（心清尚に寄す）
心を清くして高尚な物事に寄せる。
〔陶淵明〕

今回は張猛龍碑を念頭において書作しました。張猛龍碑の字形はアンバランスのバランスが主軸になっており、極めて変化に富んでいます。

「寄」ウ冠の第三画は、一旦筆を上げ、新たに筆を起して逆筆に接筆します。口はやや上部におきます。

「心」第一画を強調し、点の位置を高くします。

「清」へんとつくりの調和をよく考えて。

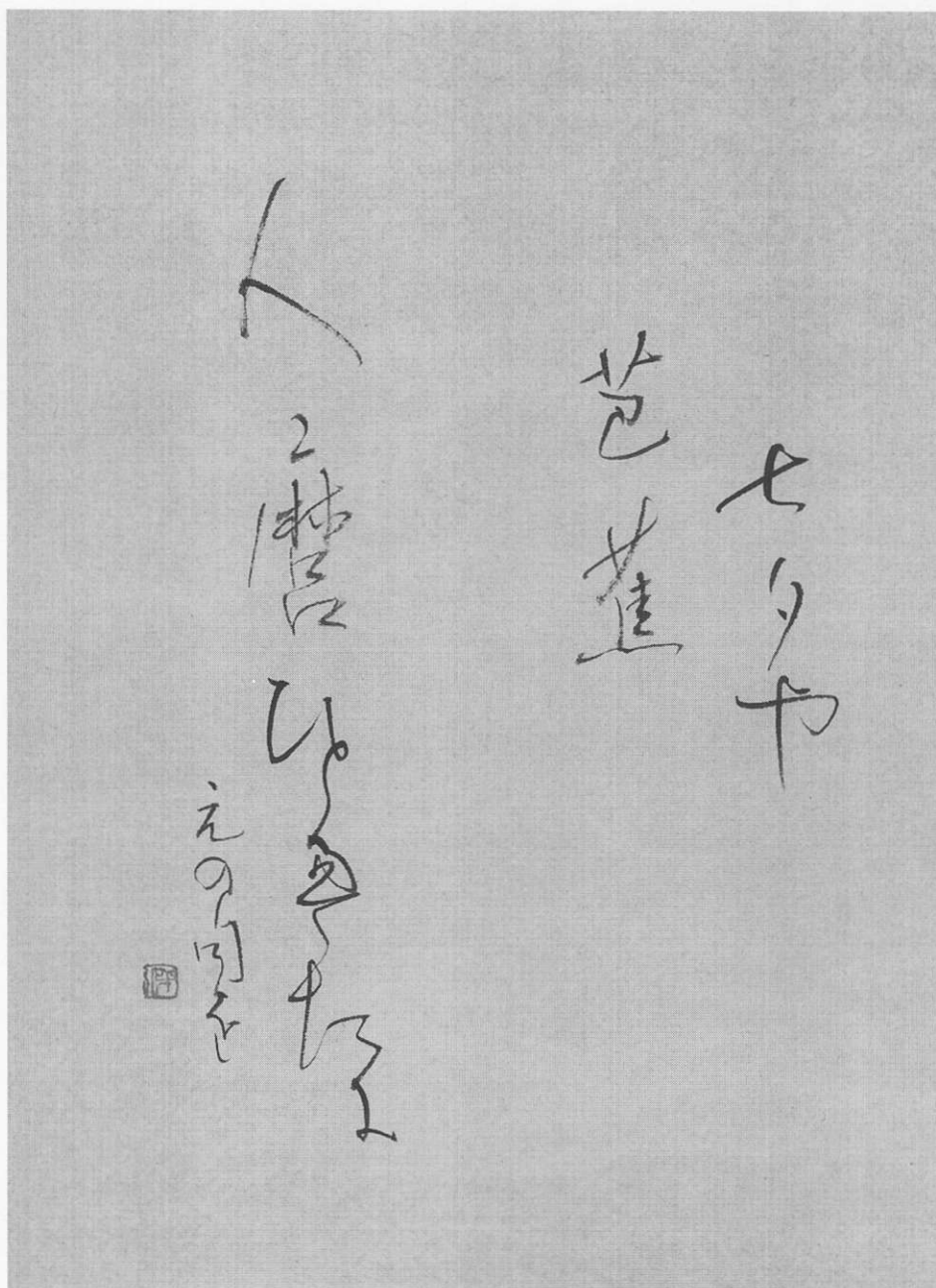
「尚」頭部を大きくして下部とのバランスをとります。

かな規定 初段以上【八月二十日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

下谷 洋子 選書

よみ方 七夕や芭蕉人磨ひとえ（盈）だに（尔） 元の句を

創作



習い方解説 (四)

下谷 洋子

七夕や芭蕉人磨一枝に

（島村 元）

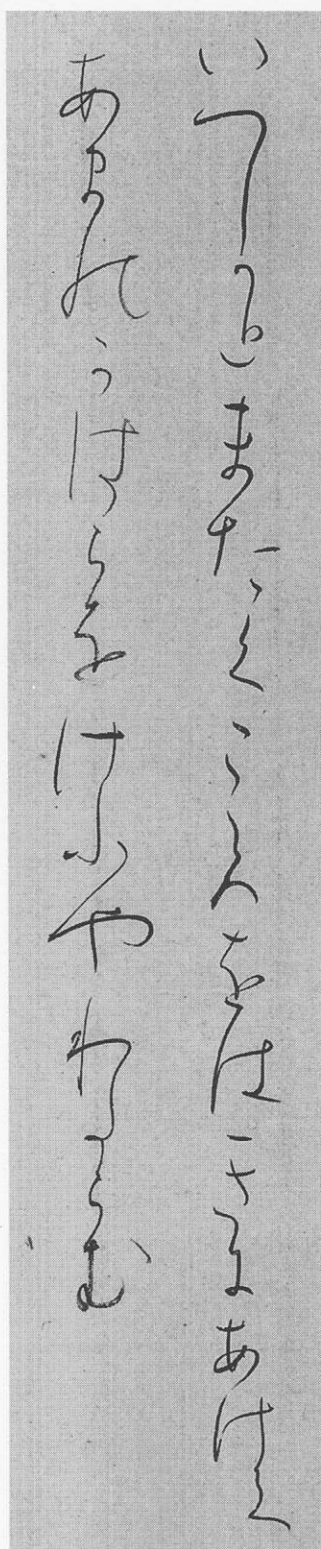
漢語の多い素材ですが優麗さは異なる表現が出来、時には楽しいものです。句意を生かしそのまま書いてもよいですが、字数が少なくなるので全体をよく見てバランスよくまとめましょう。文字の大きさ、各行の位置、行の長さなどに工夫がないと、上下が空きすぎたりして貧相なものになります。使用する筆はイタチ系が多いと思いますが、これはコリンスキーのやや大きめの筆を使いました。イタチより柔らかく、料紙との摩擦が心地よく気に入っています。

島村元（明治26〜大正12）
高浜虚子の門下。七夕竹に尊敬する芭蕉の句と人磨の歌をつるし、自分の文運を祈った。

かな規定 秀級以下【八月二十日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)

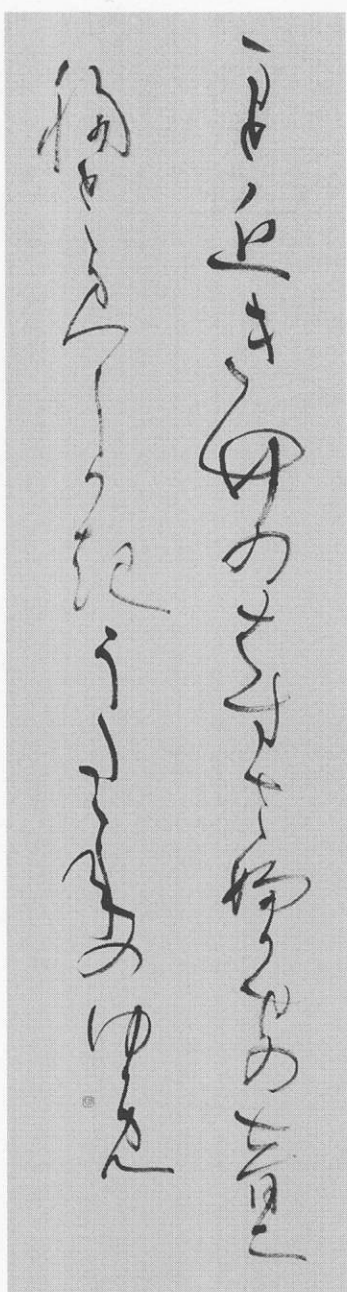


よみ方 いっしか(可)とまたぐ(久)ころをはぎに(尔)あげて(旦)

あまの(能)か(可)はらをけふやわた(多)らむ

かな条幅規定【八月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

天海矩子選書



よみ方 ま(万)ど近き竹の葉(者)すさぶ(婦)か(可)ぜの音に(二)

い(移)とど(一)み(見)じか(可)き(起)うた(多)た(一)ね(年)のゆめ(免)

創作

習い方解説 (一)

天海矩子

窓^{まど}近^{ちか}き竹^{たけ}の葉^はすさぶ^は風^{かぜ}の音^{おと}に
いとどみじかきうたたねの夢^{ゆめ}

(新古今集)

半切に和歌一首二行書きの一般的な形式です。二行目は、墨が少なくなるので、ゆっくりと筆を運び墨を置くような気持ちで書きましょう。墨継ぎの位置や連綿、文字の変換なども工夫し、連綿では呼吸が切れてしまわぬよう、連筆して下さい。

※たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上【八月二十日締めきり】

用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

桃花流水窅然去
別有天地非人間

萬城書

桃花流水窅然去 別有天地非人間

(桃花流水窅然として去る 別に天地の人間に非ざる有り)

書体 自由

漢字条幅規定 秀級以下【八月二十日締めきり】

用紙 小画仙紙半切

萩原香扇選書

少女棹輕舟
歌聲逐流水

少女棹輕舟 歌聲逐流水
(少女輕舟に棹さし 歌聲流水を逐う)

書体 自由

習い方解説 (四)

種谷萬城

李白の七言絶句「山中答俗人」の後半二句を採りました。陶淵明の桃花源記を連想させる別天地が描かれています。北魏の碑刻を意識し、楷書で書いてみました。起筆で頓坐させ、筆圧を強くし、迫力ある楷書を目途しました。龍門造像記、高貞碑、張猛龍碑、北魏墓誌銘等の臨書を通して、迫力ある楷書の書風を研究しましょう。

習い方解説 (四)

萩原香扇

今月は文字数を多くして二行書きにしてみました。十文字です。詩は、丹陽湖を少女が軽やかな舟に棹さし、歌を歌いながら流れる水のままだに行くという風景をよんだものです。よく筆を動かし、リズムをつけて軽快に書いてみましょう。字の大小、左右の字配りを考えてください。

ペン字規定 【八月二十日締めきり】

川島舟錦選書

ウィーンは音楽の都、森の都とよく
言われますが、私は建築の都と呼ぶ
のもふとやしいと思います。ギリシャ、ルネ
サンス、ゴシック様式の建物が観光客の
目をくぎづけにして離しません。
ウィーン風よう、書

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (四)

川島舟錦

『…………市内中央部のリングに沿って街を一巡するだけでも、過去のハプスブルク家の栄光と宮廷生活の華やかさをしのばせる建築物を次から次へと見ることが出来ます。』

国会議事堂、市庁舎、ウィーン大学、ニューイヤークンサートで音楽ファンにはおなじみの楽友協会ホール、市の中心地を象徴するシュテファン寺院、さらには自然史博物館、美術史博物館といった具合です。…………(略)…………

もちろん、こうした街並みは何もせずに残るものではありません。建物の新築や改築をする場合には、市役所の厳しい許可が必要です。それは街の美観維持に關しての厳しさであり、今後の美しい街づくりへのしっかりした姿勢でもあります。』

深く考えてしまう文です。漢字と仮名を調和させて書いてみましょう。

※落款を入れ忘れないようにして下さい。(落款は自分の名前を入れてください。)

今月の

ホープ作品
各部総評

No. 552

漢字部 師範 濱野 琴爽

書の技法はほぼマスターした人だが、書の内面性に気付いたのではないかと思われる作品である。
◎漢字部総評 情懷をリズムと造形に托して表現するのが芸術(書)なら、作家になろうとするなら先ず、自分を知ること。(春洋評)

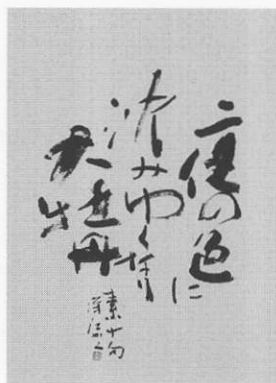


漢字条幅部 師範 米倉 馨香

歯切れよい筆致で潤渇のバランスよく爽快な作である。やや流れすぎたか。更に向上を期待する。
◎漢字条幅部総評 全般に低調な感あり。昇試の影響か。上級二行平凡作多し。更に工夫を。下級もっと大胆な取り組みを。(大雲評)

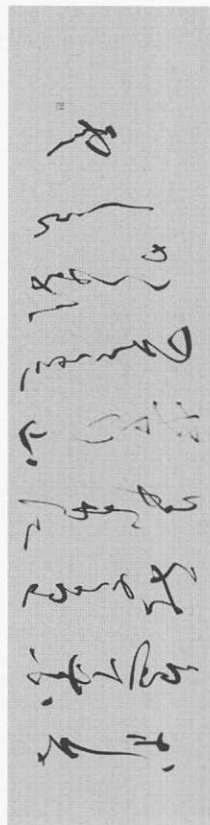
現代詩文書部 特選 大鹿 洋江

構成のセンスが光る。力まず、筆の開閉も自然に運筆されている。落款の処理は絶妙なり。
◎現代詩文書部総評 濃墨と淡墨の出品者が固定している。新しい分野への挑戦も忘れず。(素雪評)



かな条幅部 準師 高橋はる江

丁寧な運筆が伸びやかで、一字ずつの結構がよく行間が美しい。老練で上品な香り高い快作です。

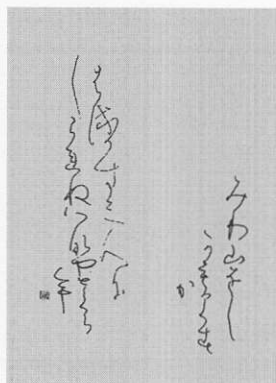


前衛書部 特選 尾形 紅霞

集中した精神力で、がっちりした造形に豊かな線質で潤渇美を表出した筆力の高い秀作である。
◎前衛書部総評 気力の充滿した作品が多くて、制作時の作家の熱気と息吹が伝わる。(芳仙評)



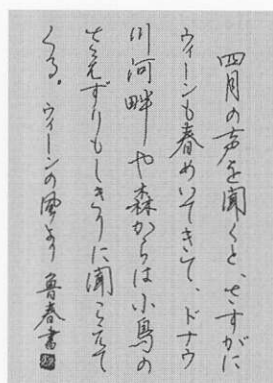
◎かな条幅部総評 上級者の一部には完成度の高いものが見られたが、一部に誤字、字粒の把握不足、墨色の悪さがあり残念。(明子評)



かな部 師範 柴 翠泉

転折からくり出されるゆるぎのない線が全体を締め、高度な技量の方です。運筆の進む姿が美しい。
◎かな部総評 誤字もなく、安定した作品が多かったが、まだまだ筆先だけで健康な呼吸が少ない。強弱のリズムを大切に。(洋子評)

ペン字部 師範 堀川 魯春
伸びやかで生きいきしている雰囲気魅力を感じます。ベテランらしい心の行き届いた見事な作。
◎ペン字部総評 冴えた線、確かな字形は普段の努力の積み重ねから生じます。心をこめて書くことが何より大切です。(小扇評)



特別研究部
優秀作品（特選）

前衛書

（詢扇）藤代京子

「公」

◆爽やかな線での構成、中央の白を開み、左右の変化を考えつつ質量のバランスをとる。やや軽い感もする。内容の充実さに意を用いるように。(春洋評)



藤代京子書

◆紙質の関係か、やや粗さが目立つが運筆のリズムを感じさせ印象的な作となった。雅印はお粗末。押印の仕方にもっと意を用いてほしい。

（大雲評）

◆思い切りよく筆を活躍させての構成線に勢いが出て全体にリズムを感じさせてくれる。紙質に墨を受け入れる滲みが出ない事が残念。

(倫子評)

◆シンプルな字からのイメージを深く暖めて、吐き出すように表現されたのであろうか。

用具を変えて更に繊細な美しさも試してほしい。

(明子評)

現代詩文書 (白扇)

天 野 白 扇「青鬼灯少女も雨をはじきけり」



◆濃墨の重厚さと、かすれの生み出すバランスが美しい。太細の変化の筆づかいが柔らかさを添えてよい。落款はうまいが押捺は丁寧！（明子評）

◆側筆の柔らかさが全体を支配する抒情、やや甘い、一字又は二字連綿に不自然さも見られるので流れの中の点画の合理性も考えてみては。（春洋評）

◆横画のリズムにポイントを置いた一行目に対し、二行目やや乱れた感があるが、懷抱の広さを感じさせてゆとりある作である。更に工夫を。(大雲評)

◆筆の持つ魔力を巧みにこなして表現され面白い。特に一行目の変化は字から受けるとは違った魅力が出ている。

二行目は違った表現で残念。(倫子評)

◆筆の持つ魔力を巧みにこなして表現され面白い。特に一行目の変化は字から受けるとは違った魅力が出ている。二行目は違った表現で残念。(倫子評)

総評

総評

ダヴィンチの受胎告知が来日中である。克明な描写、見る者の視点点によるデフォルメなど話題に事欠かなない。流体力学、解剖学などあらゆる分野に天才ぶりを示したダヴィンチだがもっとも高い地位に置いた芸術が「絵画」であった。(あらゆる学問の集大成)

二次元の芸術である書だが、ダヴィンチの絵画が三次元を克明に二次元に写し取るために様々な技法を駆使したように興行や広がり考えた構図を作り上げることができただろうか。科学的目的も作品制作には必要と思わざるをえない。

今月は90点（漢24、か7、現28、篆2、前29）少々
 毎日展で疲れ気味のようだ。（蒼玄）

〈特選候補者〉

前	前	前	篆	現	現	現	現	か	か	漢	漢
華紅	華紅	大拙	墨宣	うる	千葉	翠苑	もく	志引	蓮紅	澄春	舎人
浅野	大友	大庭	中山	川崎小枝子	澤田 雙鶴	佐々木豊苑	西川 藤象	鈴木 朝夫	千葉 華紅	新行内芳蘭	高橋 小汀
彩紅	紅蓉	幸石	無硯								



鈴木梅道書

漢字

(墨宣) 鈴木梅道

「宮中行樂詞八首」

◆作品を書く時に詩がすっかり頭に入り口ずさむ様なリズムが感じられる。墨のつけるのも全体の変化を上手に散らして表現されるのが妙。(倫子評)

◆心のひだを丁寧に表現する精神力と技術力の美事な融和が創造したものを、見せて頂き満足です。見飽きない作ですが、どこかに破調を？(明子評)

◆やや長文を三行にまとめる技術の安定を買いたい。潤渾のバランスよく、やや硬目の筆からくる破筆が小気味よいリズムを醸す。(大雲評)

◆自然な墨継ぎで宮中の行楽を詠んだ長詩を三行にまとめる。音楽的な快いリズムで坦々とした抒情、現代はこれに個性加える必要はないか？(春洋評)

前衛書

(四谷) 鈴木白鷺

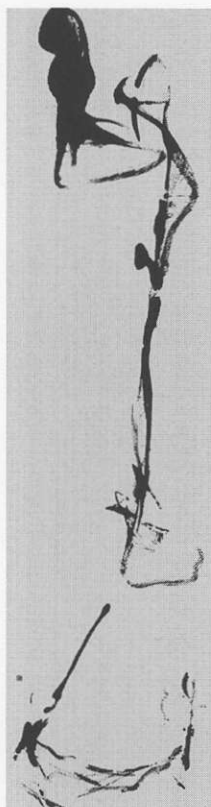
「思い」

◆中央部に大胆な余白を取り、鮮明な作となった。長鋒筆の鋭さと柔軟さを活かして冴える。下部ややうるささを感じる。印は傾かない方が。(大雲評)

◆線は途切れる事なく続くものと考えず、書かない所も書いてある所と同じ強さをもつものと考え。次の構成で欲しい線には強さが出る。(倫子評)

◆余白の明るさが印象的、上からの流れと、下部の受け止め方に計算が勝ち過ぎるように思われるがどうだろうか、線も形も少し動きがほしい。(春洋評)

◆かなの余白美の研究からのヒントがあったのでしょうか。思いきりのよさの伝わる懐の大きな作品です。さらに立体感を意識しては？(明子評)



鈴木白鷺書



加藤紫翠書

現代詩文書

(翠柳) 加藤紫翠

「花だより」

◆軽快なリズムで一貫し、潤渾も自然でよい。軽い叙事詩として軽いまとめ方をしたと解釈した。詩の内容の読みとり方が表現の出发点です。(春洋評)

◆書き出しの題名を含め三部構成は自然な展開を感じさせて安定。やや軽い筆致がリズムを醸し出している。もう少し潤いがあれば。(大雲評)

◆前半の流れる美しさが後半少し生きづまる感があるのが残念。だが、この内容から湧いてくるリズムが明るく表現され風景が目には浮かぶよう。(倫子評)

◆字形よく、リズムよく、快く制作されたことが伝わります。軽快な流れの最後に、この印は重すぎで、惜しまれます。変形印は如何ですか。(明子評)

漢字研究部
(顔氏家廟碑)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品



工藤山房

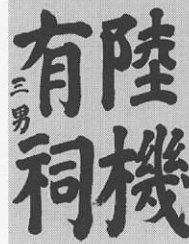
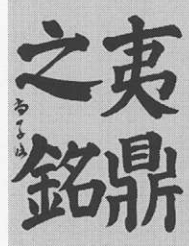
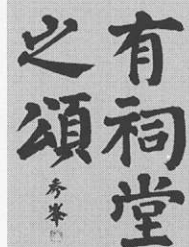
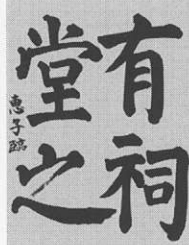
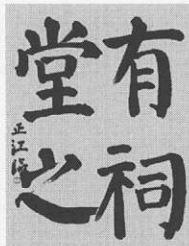
漢字研究部 特選 工藤山房

豊かさのある線で真卿の偉大さをよく臨し、まともよい。有の横画、筆圧を変えない堂々たる線、四画目のはね、左に回しながら強く弾き出す筆力。之の最終画、吊りと筆圧を加えての払い、素晴らしい学書態度です。

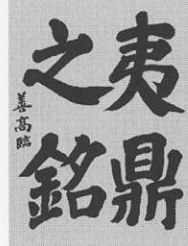
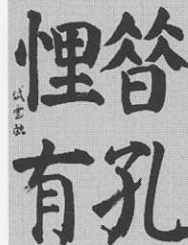
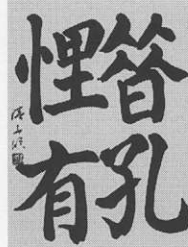
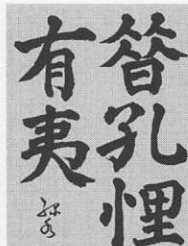
◎漢字研究部総評

顔氏家廟碑は文、書ともに真卿72歳の作。内容は学問と徳行を重んじた先祖を称え、一

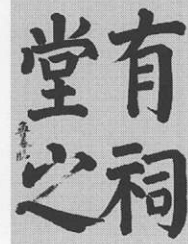
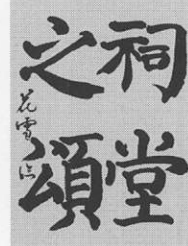
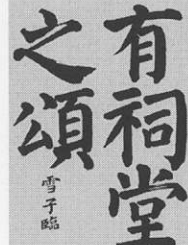
族の官歴と業跡を記す。骨太の重厚な線から誇り高い真卿の思いが伝わってくるよう。臨書に当っては解説にもあるように蔵鋒・蚕頭燕尾の用筆をまず学ぶ。それに今回の課題の結構はほとんどが正方形に近く、向勢でゆとりがある。何故このような書が生まれたのか、真卿の心を推察し筆を持ちたい。小手先で表面的な学書ではどうにもなりません。



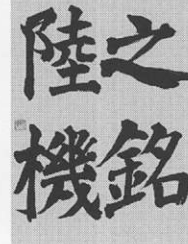
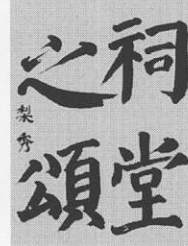
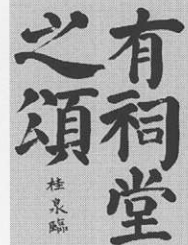
三尚祥秀恵正
男子秋峰子江



亮善岱清幸緑
子高雲子恵水



魯花千翠雪笑
春雪子葉子華



琴梨桂芝美英
爽秀泉香子子

